長崎大学のいま！

第9回

長崎大学のいま！ 多文化社会学部

文化が異なるなかでも たじろがない しなやかな人材を育てたい

佐久間正
多文化社会学部長

さくまただし
長崎大学多文化社会学部教授。一九四九年生まれ。一九七五年東北大学文学部史学科日本思想史学卒業、一九七九年東北大学文学研究科国語国文学日本思想史学専攻修士課程修了。博士（文学）。一九九六年より一年間エジプト・カイロ大学でも教鞭をとる。二〇一四年より現職。専門は日本思想史。著書に『徳川日本の思想形成と儒教』（ぺりかん社）などがある。

英語を学ぶというより英語で何を学ぶのか

長崎大学の各学部の最新情報を紹介していく「長崎大学のいま！」。最終回は多文化社会学部です。長崎大学待望の人文社会学系の学部として平成二十六年度にスタートを切りました。

佐久間正学部長のお話です。

「多文化社会学部は今年度で二年目、早くも優秀な学生たちが育ちつつあります。

現代は文化的な背景を異にする人々が交わらなければいけない多文化状況が広がっています。近年、長崎でも日常的に外国人に接することが多いですね。客船で訪れるアジアの観光客は街にあふれ、三菱長崎造船所関連のワーカーとして東欧やロシアからたくさんの労働者が来崎して働いています。少子高齢化が進む日本では、外国から労働力を入れなければ立ち行かない。ヨーロッパではすでにそういう状況になっていますが、問題も多い。文化的他者とともに働き、生活し、仕事上のパートナーシップやリーダーシップを発揮する人材が、世界中で求められているのです」。

多文化社会学部では、入学試験時に一定レベル以上の英語力が求められ、それを突破して入ってきた学生たちも最初の半年間に英語を集中的に学ぶと聞きました。

「はい、一年次前期はトランジションプログラムで徹底的に鍛えるので学生たちは大変ですが、平成二十六年度は、一年次前期のTOEFL ITP 四八四点が後期で五一五点（いずれも平均）と、確実に力がついています。短期の留学が全員必修で、六ヵ月以上の留学が必修であるグローバル社会コースの専門科目はすべて英語での授業ですし、オランダ特別コースはライデン大学への一年間の留学も設定されており、高い英語力は必須です。ただ、英語は入口。海外でのビジネスでは英語が流暢に話せることよりも、人としての品格や教養が重要視されます。そのために、英語学修に止まらず、国際法・国際政治、文化交流（史）、社会学、日本学関係など多彩なカリキュラムを設定しています」。

本年度から、この学部の一年生全員が国際学寮ホルテンシアに入寮し、留学生との共同生活が始まりました。長崎大学としては新しい試みですね。

「そうです。授業とは別の生活の場で多文化状況を受け止めるしくみです。毎日の生活のなかでコミュニケーション能力や適応能力を高め、多文化状況でもたじろがない力がつくことを期待しています」。

大学院構想を念頭に発信力を高める

大学院構想についてお教えください。

「多文化社会学部では、平成三十年度四月をめどに大学院の設置を構想しています。一つの柱は日本学を英語で発信できる、逆に世界から日本学の研究者を受け入れられる場を作ろうというものです。また、研究者に期待するのは、多文化状況の、いわば生理現象と病理現象の解析です。病理ともいえる人種差別や異文化排斥はどうして起こるのか。一方で、そういうものを乗り越えて互いの理解を深めながら共に生活して働いている状況があります。特に、うまくいっている事例をしっかり捉え、これを発展させるにはどうしたらいいかといった方法論を探求します。そのために理論的探求や、さまざまなフィールドワークのできる研究者を増やしていきたい。

また、これからは領域的国民国家の枠組を超えていくことは大切で、人文系のアカデミアが果たせる役割は大きいのではないでしょうか」。

早くも学部としての紀要も発表。教員も著書を続々と出版するなど、発信力も高まっています。二年目となり、学生の動きも活性化してきましたね。

「国連NPT（核不拡散）再検討会議に派遣されたナガサキ・ユース代表団十二名中、多文化社会学部からは三名が出ました。第一線で活躍する方々の講演会では積極的に質問して議論に参加しています。先日は学生たちが学部紹介ビデオを作成し、高校生に大変好評でした。学生たちは、この学部の特徴を理解して撮影から編集まで自分たちで行いました。先輩が存在しない新しい学部だけに、必要なものは何でも自分たちで立ち上げようという気概があり、実に頼もしいですよ」。

新しい学部ならではの試行錯誤を重ねながら、教員も学生も一体となって成果を出し始めた多文化社会学部。グローバル化が進む世界のなかで活躍できる人材が少しずつ育ちつつあります。

フィールドワークの報告会のようす。それぞれの体験を語りながら盛り上がる学生たち。

1年生は全員、この国際学寮ホルテンシアで留学生と1年間の共同生活を行います。

着眼点は自分次第 フィールドワーク実習

多文化社会学部では地域での調査技術を磨くフィールドワーク実習を重視しています。現在、二年次の学生が離島を含む長崎県内各地を訪れ、実習の真っ最中。そのなかの一つ、民俗学を専門とする才津祐美子准教授のゼミでは、毎年、長崎市飯香浦町の地蔵まつりに学生を連れていきます。

「ほぼ最初の現地調査なので、まずは自由に自分の着眼点を見つけることから始めます。祭りの主催者に継承問題を聞く学生、訪れる人々の様子を観察する学生、隣接する地域の祭りとの比較をする学生、さまざまですね」。事前学習として先行研究に目を通し、予め質問を考えた上で現地調査。調査の結果、新たに生まれた疑問は後日掘り下げるという一連の流れのなかで才津先生が特に気をつけているのが、調査地との関係。「調査中に失礼のないふるまいをすることはもちろんですが、調査後にきちんと成果をまとめて現地にフィードバックすることも欠かせません。学生には必ずお礼状も書かせます」。それらを毎年繰り返すことで、信頼関係を築いてきました。今年の調査報告会ではその点に着目し「自分たちが飛び込みで調査できるのは、これまで先生方が築いてきた繋がりのおかげ」と指摘する学生も。当初はおっかなびっくりだった学生たちも、現場で地域の人々と触れ合うなかで調査の面白さに目覚めていくようです。フィールドワーク関連科目は一年次からの必修。選択科目として海外での実習も用意されています。

祭りの変遷や飾りの材料・作り方など地域の人たちにインタビューしながらの作業は貴重な体験に。

そうめんを編んで飾る珍しい飯香浦町の地蔵まつり。見学していると「手伝って!」と言われ、見よう見まねでお手伝い。

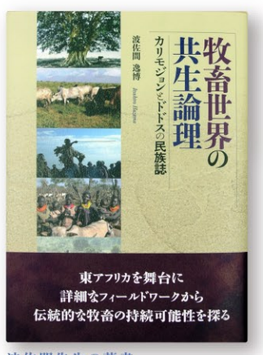
教員二人が著書を出版

教員もそれぞれの研究分野で多彩に活躍しています。今年はすでに二人が著書を出版しました。地域生態論が専門の波佐間逸博准教授は、『牧畜世界の共生論理――カリモジョンとドドスの民族誌』（京都大学学術出版会）を出版。足かけ六年にわたり、東アフリカのウガンダで行ったフィールドワークをまとめたものです。「テントを張って牧畜民と寝食を共にしました。サバンナでの生活を一から教わるなかで、牧童と家畜の濃密な相互コミュニケーションに驚かされました。内戦を含む政治的な背景から、牧畜民は粗暴であるといった誤解を解くために、きちんと研究をまとめて発表したかったのです」。伝統的な牧畜の持続可能性を様々な見地から探究してまとめた研究書です。

一方、宗教文化論が専門の滝澤克彦准教授が三月に出版したのは『越境する宗教～モンゴルの福音派』（新泉社）。こちらは一九九〇年に社会主義から解き放たれたモンゴルに急速に広まったキリスト教福音派に的を絞った一冊です。「グローバル社会を読み解くとき、『越境』という言葉がよく使われます。言葉の壁、民族の壁を越えるとき、意識や概念はどう変化していくのかを聖書翻訳の分析を通して明らかにしました」。

どちらの著書も文化について考えさせられる深い洞察があふれています。

滝澤先生の著書



波佐間先生の著書

一〇〇%学生自主制作の学部紹介ビデオが話題

七月のオープンキャンパスの際、集まった多くの高校生が興味津々で見入ったのが多文化社会学部の学部紹介ビデオ。実はこれ、多文化社会学部生の学生委員会が企画・脚本・撮影・編集をした自主制作ビデオなのです。中心となった中村優平アクバルさんのお話です。

「高校生は僕らが作ったとは知らず、素直にウケてくれたのが嬉しかったですね。写真や画像も学部学生全員が協力して提供してくれたので制作期間は二週間。集音マイクなど専用機材が買えなかったために音声が聞き取りにくかったのが今後の課題です」。ビデオ内で仲間同士らしくリラックスした表情で学部内を案内するのは、日本だけでなく中国・韓国・オランダの学生たちと国際色豊か。いろいろな国の言葉が飛び交っているキャンパスの雰囲気とともに、国際学寮ホルテンシアでの食事作りの様子など、生き生きとした場面がテンポよく続く傑作です。

左が中村優平アクバルさん。昨年、ボランティアで参加した大村湾の環境プロジェクトで学んだ映像技術が、さっそく役立ちました。右の大日方エイミーさんは「先輩がいないから自分たちでやるしかないもんね!」とにっこり。

入学四カ月で挑戦する英語プレゼンテーション

大きな講義室に一年生全員と公開講座に訪れた高校生の見学者や教員がぎっしり。ここでの檀上で行われるのが恒例の班別英語プレゼンテーション大会。一年次の教養ゼミナールの最終報告会を兼ねており、いわば前期の学びの総まとめ。一年生は入学して四カ月で早くもこんな大舞台にチャレンジするのです。それも学術的・社会的意義を十分に備えた研究計画を立て、先行研究を踏まえた調査を実施し、その結果を聴衆を惹きつけるプレゼンテーションの形で発表するという本格的なもの。各班が取り扱うテーマは「ポイ捨ての心理」から「カクレキシリタン」「飲酒コミュニケーション」など多岐にわたり、発表後は聴衆からの容赦ない質問（英語の場合もあり）にも即答させられ厳しく採点されました。この日は三班の「Trick of Love～相手がどんな行動をとったときに恋愛対象として意識するのか～」が最高得点。アンケートの集約のほか、過去の漫画をリサーチして恋愛に至るメカニズムや男女差を浮き彫りにしました。

単なる発表ではなく、調査研究の要素をクリアしなければいけない学究的なもの。パワーポイントも練りに練ったものでした。

最高得点を取った3班。メンバーはそれぞれ高校時代の制服を着て登場し寸劇風の展開も大盛り上がり。指導した小松悟准教授は「英語プレゼンは、朗読調になりがちなので、観客に話しかけるように語ることを意識させました。制服は彼らのアイデアですよ」。